

上原 美術館 通信

No.02

2018
5
spring

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2018年5月11日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



仏教館では、仏像と近代絵画のコラボレーション企画として、それぞれの作品がもつやわらかな美しいかたち、うるわしい姿に焦点を当てた展示を行います。

洋の東西を問わず、美しいものには、人を惹きつけてやまない“かたち”が存在します。その姿は仏像であったり、絵画であったりとさまざまですが、何か共通するものが根底にあるようです。

平安時代に造られた《十一面観世音菩薩立像》は、ふっくらとした顔立ち、ボリューム感のある肉体と、何よりも腰を左に強くひねって立つ姿が特徴的です。離れてこの像を見ると、全体の輪郭がやわらかなS字曲線を描いているのが分かります。

この美しさは、不思議なバランスで成り立っているようですが、このやわらかな曲線は、今回展示する他の絵画作品にも、共通したものがみられます。

例えば、オディロン・ルドン《ブリュンヒルデ、神々のたそがれ》は、北欧神話に登場する半神で凛とした表情を浮かべています。その横顔をかたちどる繊細な曲線は、厳しさというよりも、前述の十一面観世音菩薩がもつ全体のやわらかさと同様の要素があるようです。

端正なたたずまい、均整のとれた姿をもつ《薬師如来坐像》(初出展)。平安時代後期に登場した仏師、定朝が造った平等院鳳凰堂の阿彌陀如来坐像は、後に「仏の本様」として広く流行し、このスタイルを踏襲した仏像が多く造られました。本像もこの定朝様を踏襲した仏像で、丸い顔、華奢な体躯、そして体にまとう衣は薄く、衣の襞も浅く彫られています。膝の厚みはあまりなく、どっしりしたというよりもむしろ軽やかさを感じさせる美しい作品です。

本展でそれぞれの作品がもつ“うるわしい姿”をどうぞお楽しみください。(櫻井)



《十一面観世音菩薩立像》平安時代(10世紀)・重要美術品



《薬師如来坐像》平安時代(12世紀)、個人蔵



オディロン・ルドン《ブリュンヒルデ、神々のたそがれ》1894年

「自分はあるものを、あるが儘に現はしたい。迫真的なものを描きたい、本當の自然そのものをキャンバスにはりつけた。樹を描くとしたら、風が吹けば木の葉の音のする木を描きたい(中略)触れば冷たい川、湖水の深さまで表はしたい」(安井曾太郎「私のレアリズム」『美術新論』第8巻第1号、1933年1月)。風景を描くことについて、安井曾太郎はそう述べています。画家たちは耳を澄ませば聞こえてくる風や水の音、肌触りまで表現しようと試みました。

7月の高原を描いた《十和田湖》は、初夏の風に吹かれる木々のざわめきや静かな湖水の音までも聞こえてくるかのようです。同じような緑でも木の葉や、それに絡む鶯、手前の草など質感の違いが見事に描き出されています。風が吹き抜けるような湖面には一艘の小舟が浮かび、身を乗り出す人の手からは湖水の冷たさまでも感じさせるようです。遠くにかすむ紫がかかった山は十和田湖の澄んだ空気を想起させます。

安井は自然そのものを絵であらわしたいと奮闘しました。そうした安井の試みはこの絵にもあらわれており、本作の大画面の前に立つと十和田湖の前に佇んでいるようにさえ錯覚します。

こうした移ろいゆく自然を見つめるまなざしは、モネ、シスレーら印象派の絵画にも見ることができます。それまで屋内で制作をしていた画家たちは、19世紀にチューブ絵具が誕生すると、屋外で制作するようになります。彼らは理想的な風景ではなく、風のゆらめきや水の流れなどを分割したタッチで描くことで、移り変わる一瞬の風景をとらえられるよう

になりました。そのタッチから完成作ではなく「印象に過ぎない」と嘲笑されていたこうした絵画は、いつしか印象派として高く評価されるようになりました。モネ《ジヴェルニー付近のセーヌ川》では、画面左下の水面に、平筆による絵具がそのまま乗せられています。少し離れてみると、それらはゆらめく水のように静かに色彩を放ちます。



クロード・モネ《ジヴェルニー付近のセーヌ川》1894年

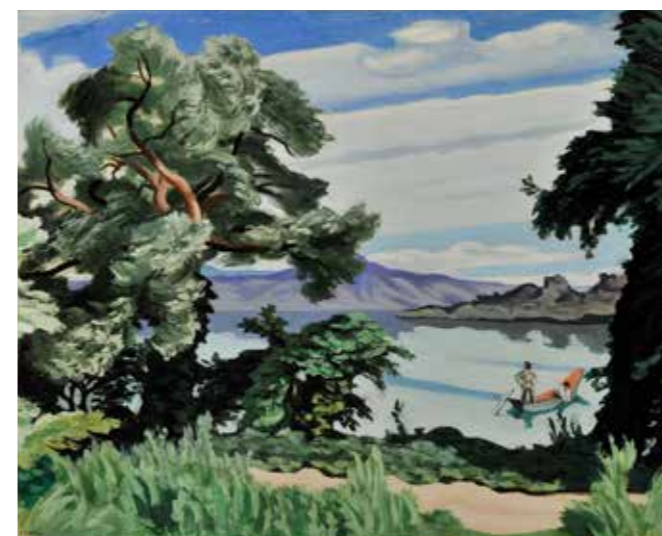


竹内栖鳳《海濱小暑》1927(昭和2)年

日本画家たちも独自の観察で自然をとらえています。竹内栖鳳《海濱小暑》では、淡くにじむような日本画材の青が海の揺らめきを感じさせます。画面右の小舟は潮風を受けて帆を広げ、砂浜の上の草むらや松にもその風が届くかのようです。

画家達が描く風景画を見つめると、風の音や水の動きまでもが目に映ります。本展では当館収蔵品から、西洋絵画や日本絵画のジャンルを超えて、風や水の表現に注目します。

(土森)



安井曾太郎《十和田湖》1932(昭和7)年

2018年3月20日、伊豆南端の町・南伊豆町は、4件の仏像と2件の絵画を町指定文化財に指定しました。

指定されたのは、手石地区・青龍寺の薬師如来坐像(平安時代)と地獄極楽図(文化十二年、1815年)、伊浜地区・普照寺の観世音菩薩坐像(平安時代)、下賀茂地区・慈雲寺の観世音菩薩立像(平安時代)、子浦地区・西林寺の阿弥陀如来立像(鎌倉時代)、大瀬地区・浄性寺の頭如上人図(慶長十六年、1611年)。今回はそのうち、平安時代の仏像をご紹介します。

青龍寺薬師如来坐像は像高97.0cm。頭体幹部(頭部と体の中心部分)を一材で造り、脚部と両腰脇、右肘先、左上腕の外側、両手首先などを別に造って寄せる像です。学問的には、頭体幹部が一材で造られていれば、脚部や両手などの細部を別に造っても一木造と言いますが、本像のように大きな像を一木造とするのは平安時代でも比較的古い像に見られる特徴です。また本像は胴体の前面下部、脚部を寄せる部分を平らに削らず、丸太の曲面のままとしているため、細かい材を補いながら苦心して脚部を取り付けており、これは十世紀の仏像に見られる特徴。本像の目には鎌倉時代以降に普及する玉眼が入り、脚部の衣文も形式化するなど、時代が降る要素が多く見られますが、これらは江戸時代の修理で改変されたものであることが調査によって確認されました。このことから本像は10世紀後半から11世紀に制作された南伊豆町最古の仏像と考えられ、今回の指定を受けました。

青龍寺像と同じか、少し遅れた時期の仏像とみられるのが普照寺観世音菩薩坐像です。像高80.8cmの等身大の

像で、頭体幹部を針葉樹の一材で造り、両手首先を含む両手の肘先、脚部を別材で造っています。個性的な作風は地方で制作された像であることを示し、青龍寺像と並び、南伊豆町を代表する平安仏として貴重で、南伊豆に伝わる栗の長者伝説に関わる像である点も評価されました。本像は地元の漁師の網にかかって引き上げられたと伝えられ、かつては本像を引き上げた者の子孫のみが拝観を許されていたという嚴重な秘仏ですが、現在は正月3日の午前中に限り、離れた位置からですが拝観することができます。

慈雲寺観世音菩薩立像は像高55.4cm。左肘先、右手首先、両足先、垂下する天衣以外のほぼ全身を桧の一材から彫出す一木造です。近年の修復による厚い彩色に覆われていますが、一木造の構造や像容から平安後期、12世紀の仏像と考えられます。本像は慈雲寺背後の山中にかつて存在した岩谷堂の秘仏本尊であったと伝えられています。

南伊豆町における町指定文化財の指定は初で、画期的な出来事でしたが、本件に上原美術館は大きく関わることができました。南伊豆町教育委員会は、開館以来35年間伊豆南部の仏像調査を行ってきた当館に町内の文化財について下問、当館は蓄積された調査データをもとに指定候補を推薦するとともに、教育委員会との合同調査を実施、この結果を受けて今回の指定となりました。当館の伊豆の仏像調査は現在も継続中。その成果を様々な形で発信することで、地域への文化貢献の役目を担って行きたいと考えております。



上：薬師如来坐像(平安時代)南伊豆町手石・青龍寺
中：観世音菩薩坐像(平安時代)南伊豆町伊浜・普照寺
下：観世音菩薩立像(平安時代)南伊豆町下賀茂・慈雲寺

2018年4月14日、特別展『リニューアル記念Ⅱ 美を旅する—静岡県立美術館のコレクションとともに—』が開幕しました。他館より多くの収蔵品をお借りして、仏教館と近代館で展示するのは当館の開館以来、初めての試みです。この展覧会は静岡県の貴重な美術品を有効に活用することを目的に、静岡県立美術館の全面的なご協力のもと、大規模な合同企画展として実現しました。今回のコラムでは企画から展示までの裏側を一部ご紹介します。

静岡県立美術館と上原美術館のコレクションが出会う今回の展覧会は、「旅」をテーマとしました。展示案を検討するにあたっては、何度も模型を作って検証を行います。それを修正しながら、目指す展示に近づけていきました。

実際に出品作品を決定する上で、最も重要となるのが作品のコンディションですが、そのほかサイズなど物理的な課題もあります。今回の展覧会において、モーリス・ルイス《ベス・アイン》は、西洋と東洋のジャンルを越えた美を象徴する重要な役割を果たしていま

す(本紙表紙参照)。この作品は高さ2.3×幅3.3メートルの巨大な現代絵画。梱包するとさらにサイズが大きくなります(2.5×3.8メートル)。この作品が仏教館奥の展示室まで搬入できるかが大きな課題となりました。途中の扉は高さ2.6×幅1.8メートル、さらに廊下はクランクし、奥の展示室まで搬入するには幾つもの難関があります。設計業者のCAD図面による確認では、梱包サイズによっては搬入できるという理論上の答えがでました。

しかし、それだけでは実際に搬入できるか分かりません。美術品専門業者に実寸模型作成を依頼し、搬入試験を行いました。天井まで数センチしか余裕はありませんでしたが、作品を安全に搬入できることが分かりました。そこで初めて今回の企画が成立することになりました。

また、本展覧会では、作品を美しくお見せするため、ケースも作り込んでいます。展示ケースの木材には、美術品を劣化させる酸性物質の放散を防ぐため「枯らし」木材を使用します。近代館では、神護寺経の表紙にある宝相華文

の花模様と速水御舟《芍薬図》の花を並べるため、お経を巻いた状態で展示する特殊なケースを作成しました。今回の展示では通常はあまり見ることができない巻子の表紙をご覧いただくことができます。その他、照明にも力を入れていますので、ぜひ光環境もお楽しみいただければと思います。

今回、ご紹介しました展覧会の裏側はごく一部です。展覧会は、様々な方々のご協力により成り立っています。静岡県立美術館の皆様をはじめ、関係する多くの方々にこの場をお借りして、改めて感謝申し上げます。



モーリス・ルイス《ベス・アイン》は、隙間が数センチという厳しい搬入となりました。



展示企画を検討した後、縮小模型を作成して、展示のイメージを固めていきました。



神護寺経の展示は、浮遊感を出すため、展示具を特別に作成しました。

美を旅する — 静岡県立美術館のコレクションとともに — 関連イベント

開催中の展覧会「美を旅する—静岡県立美術館のコレクションとともに—」では、静岡県立美術館と上原美術館がコラボレーションして様々なイベントを開催しております。5月19日、20日は下田市で黒船祭りも開催されます。お子様も楽しめるイベントもございますので、ぜひご参加ください。以下のイベントは全て参加費無料です。 ※写真はイメージです

「ねんど開放日/えのぐ開放日」

ねんど開放日では、静岡県立美術館よりおよそ1トンの粘土を運んで、自由に遊ぶイベントを開催します。裸足になって、親子で楽しんでください。えのぐ開放日は大きなシートに自由に絵具で描くイベントです。普段できないような自由な絵具遊びを楽しめます。いずれも静岡県立美術館のインストラクターがサポートしていただきます。

①ねんど開放日 5月19日(土) 11:00～、14:00～

②えのぐ開放日 5月20日(日) 11:00～、14:00～

場所 道の駅 開国下田みなと

対象 3歳以上の方 *親子で参加して、活動や会話を楽しんでください。

定員 各回50名 *予約不要

持ちもの 服装 タオル、汚れてもいい服(はだしで活動します)

*直接会場にお越しください。

定員を超えた場合は入場できませんのであらかじめご了承ください。



「学芸員によるギャラリートーク」

仏教館と近代館の作品を学芸員が解説します。

日時 会期中の毎週土曜日14:00～ *仏教館25分/近代館25分

集合場所 上原美術館 仏教館 定員 先着20名 *予約不要/要入館券

パスポート型小冊子の発行

開催中の展覧会『美を旅する—静岡県立美術館のコレクションとともに—』では、本展のテーマである旅にちなんで、パスポートに見立てた小冊子を無料配布しております。館内にはスタンプを設置しておりますので、ご自分だけの美の旅のパスポートが作れます。



無料送迎バス

5月19日、20日は、上原美術館-伊豆急下田駅-開国下田みなとをつなぐ無料送迎バスを運行します。(黒船祭開催のため、渋滞も予想されますのであらかじめご了承ください)

下田市のイベント



下田市黒船祭

ペリー提督が率いる米国海軍が黒船で来航したのは1854年のこと。それを記念して1934(昭和9)年に下田市の最大のイベント黒船祭が始まりました。今年5月18日から20日まで、花火大会やパレードなどさまざまなイベントが開催されます。5月19日、20日の「ねんど開放日/えのぐ開放日」は黒船祭の協賛イベントになります。新緑の下田で開催されるお祭りをお楽しみください。

活動報告

年度末を迎え、今年も実技講座の作品展を開催、一年の成果を多くの方々にご覧いただきました。また静岡県や伊豆市の視察研修の受け入れ、職場体験の受け入れを行いました。伊豆半島の仏教美術の調査も引き続き行っております。

教室作品展開催

平成29年度の上原美術館実技講座の成果を発表する作品展を3月に開催しました。

写経・仏像彫刻教室受講生作品展

2018年3月1日～6日 会場：旧だるま茶屋

デッサン・水彩画教室受講生作品展

2018年3月15日～20日 会場：近代館・会議室

日本画教室受講生作品展

2018年3月23日～28日 会場：近代館・会議室



視察研修受け入れ

3月6日、静岡県の賀茂地域教育振興センター研修の一環として、鑑賞の体験授業を行いました。アートカードを使った模擬授業や展示室の鑑賞授業などを行い、活発な意見交換が行われました。

2018年 2月23日 県立松崎高校教職員研修

3月6日 静岡県賀茂地域教育振興センター研修

3月7日 伊豆市教育委員会・伊豆市美術館建設準備委員会



職場体験

地元の下田高校のインターンシップ受け入れを行いました。事務、受付業務のほか、学芸業務を体験していただきました。

2018年3月15日 下田高校インターンシップ

教育普及活動では、授業入館や出張授業を行っています。

鑑賞教育や修学旅行の事前学習など、ご相談ください。



調査活動

2018年2月19日河津町・寺院調査/3月12日三島市・寺院調査/3月13日、19日沼津市・個人宅、寺院調査

3月末までに3カ所の寺院、1カ所の個人宅調査を行いました。寺院調査では、江戸時代の涅槃図を実現する機会を得ることができました。涅槃図は釈迦入滅を描いた絵で、2月もしくは3月の涅槃会の際に懸けられるものです。合計3幅実見し個性豊かな涅槃図を寺院のご協力を得て調査出来ました。今後も継続して、伊豆半島に遺されている涅槃図の調査を行っていきます。



雑誌『目』連載

古美術や骨董を紹介する雑誌『目』2018年4月号(目の眼株式会社)では、土森智典主任学芸員が「コレクターのまなざし」と題して、上原コレクションから絵画をご紹介する隔月連載が始まりました。第1回は、上原コレクションの始まりでもあるアンドレ・ドラン《裸婦》を、蒐集にいたるエピソードを交えて紹介しています。本書は一般書店にてお求めいただけます。



伊豆だより



3月下旬には寒さが戻り、天城山にも雪が降りましたが、伊豆の山々には山桜が咲き、山に広がったパッチワークのような風景を楽しめました。美術館に隣接する向陽寺では、しだれ桜とソメイヨシノがほぼ同時期に満開になり、風が吹くと桜吹雪で幻想的な景色でした。また下田市のお隣、松崎町の休耕田を利用した花畑には、ゴールデンウィーク頃までアフリカキンセンカや矢車草などの花が咲き、暖かい春を感じられます。

5月18日～20日は下田市で第79回黒船祭が開催されます。黒船祭期間中は当館の展覧会『美を旅する—静岡県立美術館のコレクションとともに—』が開催中です。黒船祭にあわせてぜひ当館にもお越しください。(櫻井)

おすすめの展示館



河津平安の仏像展示館

上原美術館がある下田市の東隣、河津町の谷津地区には、26体の平安仏群を伝える南禅寺という寺があります。2013年3月、この南禅寺仏像群を保存・展示公開する施設としてオープンしたのが、「伊豆ならんだの里 河津平安の仏像展示館」(毎週水曜日と年末年始休館、大人300円)。館内に入ると、平安時代前期、9世紀の仏像と考えられる南禅寺本尊・薬師如来坐像、二天立像をはじめ、等身大の梵天立像、帝釈天立像、十一面観音立像、東海地方最古の地藏菩薩立像など、伊豆最古の9～10世紀の仏像群が林立するさまに圧倒されます。伊豆急行線の河津駅からタクシーで5分、さらに10～15分ほど坂道を登った場所にありますが、一見の価値があります。(田島)



池田20世紀美術館

伊豆半島で近代絵画を楽しむなら、当館のほかに、伊東市にある「池田20世紀美術館」(毎週水曜日休館、一般1,000円)へ足を運んでみてはいかがでしょうか。

ステンレス・スチール貼りのモダンな建築が特徴的な本美術館には、主に20世紀に活躍した芸術家の作品が並んでいます。フランスで活躍したピカソ、マティスら上原美術館でおなじみの画家たちだけでなく、アメリカで活躍したポップ・アートの芸術家ウォーホルや、リキテンスタインらの大作もずらりと並ぶ展示室は壮観で、見応えがあります。こうした激しく前衛的な作品たちがある一方で、本美術館には小ぶりながら隠れた名品がいくつも展示されています。例えば、彫刻家ロダンとも交流のあった画家カリエールの神秘的な人物画や、フランスの美術アカデミーでも活躍したエンネルの裸婦像からは、近代絵画の知られざる一面を垣間みることができます。(齊藤)

次回休館日は2018年5月21日(月)～5月25日(金)です(展示替えのため)



開館時間
9:00～17:00
最終入館は16:30まで

休館日
展覧会会期中は無休
展示替え日のみ休館

入館料
大人/1,000円、学生/500円
高校生以下無料 *団体10名以上は10%割引

所蔵記載のないものはすべて上原美術館蔵

表紙写真：仏教館展示室にかけられたモリス・ルイス《ベス・アイン》。